埼玉新聞

(5) 経済 2018年(平成30年)3月21日(水曜日)

サイ・テクこらむ 知と技の発信【346】

埼玉大学・理工学研究の現場

見沼たんぼ保全へ

深堀 清隆 准教授

■変貌

平成26年から、さいたま市の見沼たんぼ地域で活動している市民団体と地域の景観保全について議論を重ねてきました。成果は「見沼たんぼ地域、景観・未来へのビジョン報告書」として最近公表されています。この地域は市街地近郊の広大な緑地で、縄文期の遺跡、江戸時代の見沼代用水などで知られる文化的景観の地です。高度経済成長の開発圧力に対し、広い谷戸低地の遊水機能保持、農地保全のため開発が規制されてきました。

しかし最近、農業の衰退により土地利用の転換が進み、再び景観の変貌が目立っています。この地域は県内でも特に市民活動が盛んで、その活動は日本ユネスコ協会連盟のプロジェクト未来遺産にも登録されています。行政や農家と連携した水田の保全や斜面林の環境管理、地域固有の伝統の復活などその実績は見事なものです。

それでも広大な地域ですから、彼らの手の届かぬ所で都市的土地利用は進んでいます。先導的な農家や団体の活動スポットだけでなく、保全を周辺地域までどう広げるかが研究会の課題でした。私はこの地域の景観の要は斜面林だと考え、100カ所以上の緑地を一つの大きな森として捉える必要性を感じていました。

■大宮台地

そこで都市化が進んだ地域も含め、大宮台地縁の斜面林グリーンベルトと保全対象を捉え直し、地域全体で緑地を育てる考え方を提案しました。団体の方々は参加者の少なさ、担い手の高齢化に苦慮していますが、農作業や森の管理作業への都市住民の貢献を期待しています。そのため見沼の近郊農地と都市部が連携するという考え方が不可欠です。

そこでさいたま市の安全な住環境は、大宮台地の地形や周辺の自然の恩恵を受けて発展してきたことを都市住民が再認識することが大切と思ったわけです。「大宮台地」という言葉を使うことで、斜面林保全の意義を単なる労働奉仕ではなく、さいたま市の文化的源泉を守るための貢献として市民に共有してほしいと思います。

■相互扶助

私の関係する学科ではまちづくりの講義、見学会等により大学生に本地域を紹介しています。農業支援活動の意義を積極的に認識する学生も多い一方、実利の見えにくい生物多様性や景観の保全、文化の継承など倫理的な要求には抵抗感を感じる人もいます。

今後、都心部の高密度な土地利用と郊外部の農地、緑地の保全活用など土地利用の区分をより明確にする中で、郊外部のコミュニティーや環境の保全を都市部が支援する相互扶助の考え方が必要です。見沼たんぼ地域では、地産地消の農業を支援するなどは理解を得やすいですが、斜面緑地保全の多面的な効用、公益性は十分理解されていません。

研究会の成果を基に団体は埼玉県、さいたま、川口の2市に斜面林公有地化の要望を行い理解を得ました。しかし、見沼の環境資産を次世代に継承しようとしても、生物多様性や文化だけでは、やっかいなものを押し付けたと思われる時代です。

現世代が目に見えない地域文化の価値を伝える意思も説得力も持たないなら、次世代が魅力と感じるような、より目に見える斜面林の利活用の方法を示さなければ、何の魅力もない荒れた公有地が量産されるだけです。

ふかほり きよたか 1968年生、97年3月埼玉大学大学院修了。博士(学術)。現在同大学大学院理工学研究科准教授。専門は景観工学。

埼玉経済

企業、団体、商店街などの話題や情報をお寄せください
TEL 048・795・9161 FAX 048・653・9040
✉keizai@saitama-np.co.jp